1600フェス用

2024-10-01 01:38:45

今まで書いた1600、5160のまとめです

Posted by @dbh_litorena (/u/dbh_litorena)

1 2 3 4 5 6 7

Page : 1/7

今まで書いた1600、5160のまとめです。

○きみとおそろいなら(現パロで双子な1600)、1100文字程度
マグカップを買いに行くお話。

○美しいのはそれではなくて(1600)、960文字程度
折本の本文として掲載していたお話。飴玉を美しいというコナーくんのお話。

○ころりと落ちた先は(1600)、900文字程度
折本の本文として掲載していたお話。60くんの眉間を指先で押すコナーくんのお話。

○メイド服を着ることとなった1600、1800文字程度
潜入捜査でメイド服を着ることとなった二人のお話。ミニスカメイドな60くんとクラシックメイドなコナーくん

○素直じゃない僕ら(5160)、1400文字程度
意地を張っている二人のお話。

○お互いだけを感じていて(5160)、540文字程度

お互いに夢中であってほしい、そんなキスの日のお話。

1600フェス用

2024-10-01 01:38:45

今まで書いた1600、5160のまとめです

Posted by **@dbh_litorena** (/u/dbh_litorena)

1 2 3 4 5 6 7

Page : 2/7

【現パロ1600】

「ねえ、これとかどうかな」
　可愛らしい色合いの小物や雑貨が並ぶ棚の前、双子の兄であるコナーはにこやかに僕へと顔を向けた。その手にはデフォルメされた可愛らしいクマのイラストがプリントされた白いマグカップが握られている。
「このぼんやりとした顔、良くないかい。とても可愛いと思うんだけど、どう思う？」
「……、悪くない」
　僕達の後ろを甲高いはしゃぎ声が通り過ぎていく。その声に肩を縮めながら小さく頷くと、コナーが肘で小突いてくる。
「まだ恥ずかしがってるのかい、別に気にすることはないだろうに」
「う、うるさい！大体、お前のせいでこんなとこに来る羽目になったんだろ！」
　そう声を荒げるとコナーが言葉を詰まらせた。僕達が愛用していたマグカップをうっかり手から滑らせて割ってしまったのは数日前のことで、床に散らばる破片を前に呆然と立ち尽くすコナーを脇へと押しやって片付ける羽目になった僕は始終顰めっ面をしていた。本当は不注意に割ってしまったことを怒鳴ってやりたかったが、悪気があって壊したわけではないのはわかっていたし、何よりも僕以上に落ち込んでいる様子に追い打ちをかける気にもなれなかった。しかしながら怪我がなくて良かっ

たとはいえ、我が兄ながらなんと間抜けなことか。もう少ししっかりとしてもらわなければ困る。そう思いながら深く溜息を零すとコナーがマグカップへと視線を落とした。

「ごめん…」

今後は気をつけるから、と眉を下げてか細い声で謝罪を口にしたコナーに今度は僕が狼狽えてしまう。

「…いや、僕も蒸し返して悪かった」

昔から雨に濡れた子犬の如くしゅんとするコナーに弱い。罪悪感に胸をちくりと苛まれながらもぼそぼそと呟くとちら、と僕を窺ってくるコナーの視線に更に居た堪れなくなってくる。その視線から逃げるように目の前の棚からマグカップをひとつ手に取った。

黒いマグカップにコナーが持つカップと同じようにクマがプリントされていて、こちらはシロクマなようだ。白いマグカップにプリントされているクマよりも眠たげに見えて、少し可愛らしく見える。じっとマグカップを見つめているとコナーがそろりと手元を覗き込んできた。

「それにする？」

「……お前はそれでいいのか」

「君がいいなら、僕もこれがいいな」

ふにゃりと締まりのない顔で笑うコナーに安堵して、なら決まりだと会計へと向かう。レジに辿り着くまでの間に可愛らしい小物に目を奪われて足を止めるコナーの腕を引っ張りながら、横目で商品を確認する。次に来ることがあれば、あれを買うのもいいかもしれない。そんなことを思いながら今度はレジとは反対側へと向かおうとするコナーを全力で止めるのだった。

1600フェス用

Public 14views 7333
2024-10-01 01:38:45

今まで書いた1600、5160のまとめです

Posted by @dbh_litorena (/u/dbh_litorena)

1 2 3 4 5 6 7

Page : 3/7

【美しいのはそれではなくて】1600

たまにコナーは本当に自分と同じプログラムを有しているのか疑問に思う時がある。今だってそうだ、貰った飴玉の包み紙を剥がしたコナーは頬を緩めてころりと手の中で転がした。何が楽しいのか、揺れる球体を視線で追う姿に60は眉間に皺を寄せた。
「そんなもの、僕達が貰ったって何の意味もないだろうに」
「そうかもしれないね。でもほら、綺麗じゃないか」
そう言ったコナーは赤い飴玉を空へと翳した。眩い陽に照らされて輝く飴玉は、言われてみれば綺麗かもしれないが本来は食すために作られた物だ。決して観賞用ではない。それよりも自身と同じブラウンの瞳が輝く様の方が60の興味を引いた。
「知ってるかい、60。ネットで見たんだけど、これをたくさん瓶に詰めるととても美しいんだ。集めてみるのも良いかもしれない」
「お前、それが何のために作られているのか知らないのか。僕達は摂食機能すらないんだぞ、集めたって何もならないだろ」
「勿論、知っているさ。綺麗だから集めてみたい、そう思うことは何も悪いことじゃないだろう。――ああ、そうだ、趣味みたいな物だと思えばいい」
「…なおさら、僕達アンドロイドが集める意味が分からない。やはりお前は変だ、51」

「そう？」

　首を傾げたコナーは翳していた飴玉を包み紙で包み直すと、ポケットへと突っ込んだ。そして何やら思いついたのかニコリと笑みを浮かべたかと思うと、早足に60へと近づいてきて有無を言わさず腕を取った。

「ねえ、君も手伝ってよ。飴集め」

「は？な、何故僕が手伝わないといけないんだ」

「一人より二人、だろう。それに僕だけで瓶を満たすよりも、二人で集めた方がより綺麗になると思わない？」

　いい案だ、と笑うコナーは返事も聞かずに引き摺ってどこかへ連れて行こうする。慌てた60はその場で踏ん張った。

「よし、まずは瓶を探しに行こう。どれくらいのサイズがいいかな。60はどう思う？」

「し、知るか！僕を巻き込もうとするな！勝手にやればいいだろ！」

「僕はバケツくらいの大きさがいいと思う」

　——やっぱりコイツのプログラムは僕とは違う！

　連れて行かれまいと反対側へ体重を掛ける60とそんな彼を連れて行こうとするコナーの力比べは、二人を呼びに来たハンクが来るまで続くのだった。

1 2 3 4 5 6 7

1600フェス用

Public 14views 7333
2024-10-01 01:38:45

今まで書いた1600、5160のまとめです

Posted by **@dbh_litorena** (/u/dbh_litorena)

1 2 3 4 5 6 7

Page : 4/7

【ころりと落ちた先は】1600

　端末に手を翳して資料を閲覧していた60は不意にキーボードに影が射したことを不審に思い顔を横へと向けた。そうして向けた目と鼻の先にコナーの顔があってぎょっと頭を仰け反らせた。ぎ、と耳障りな音を立てた椅子にも驚きに身を固まらせる60にも無頓着な様子で何やらじっと一点を見つめている。
「君はいつだってここに皺が寄ってるね」
　白い指先がつん、と60の眉間を突く。軽い衝撃に目を瞑った60は感覚を散らすように首を振った。軽く椅子を後ろへ引いてコナーから距離を取るとじろりと睨み付ける。
「余計なお世話だ、僕がどんな表情をしていようがお前に関係ないだろ」
「だけどそんなに皺を寄せていると取れなくなってしまうよ。もう少し力を抜いたほうがいいんじゃないかな」
　へらりと緊張感のない笑みを浮かべるコナーはハンクが言うように間抜け面だ。自分もこんな表情を浮かべることは出来るだろうかとシミュレーションをしかけて、すぐさま馬鹿馬鹿しいと結果を待つことなく切り上げた。そんな60に構わず再び眉間に人差し指を当てたコナーはぐいぐいと皺を伸ばすように引っ張ってくる。
「おい、やめろ。僕に触るな」

鬱陶しいとばかりにその指先を振り払うと子供のように唇を尖らせるコナーに小さく舌打ちをする。何故そうも触れたがるのか、変異体となった同機型の行動は理解が出来ない。コナーが触れたところを指先で摩っていると、その指先を取られてしまい、何事かと目を瞬かせている60に再び顔を近づけてくる。そうするとブラウンの瞳に同じ瞳が写り込んだ。
「な、なに」
「ああ、やっぱり」
　コナーはふわりと笑った。その笑顔にシリウムポンプがとくんと跳ね、困惑と動揺で落ち着かない気分となってしまう。
「君、眉間にあまり皺を寄せ過ぎない方がいいよ」
「…何故？」
「その方が可愛いだろう？」
　そんな爆弾発言を投げてきたコナーはそれだけ言って満足したのか、自分の席へと戻って行ってしまった。可愛い。可愛いとはなんだ。何故コナーは僕にそんなことを言うんだ。ぐるぐると思考が空回る。なぜか熱くなる頬を両手で押さえながら60はぐぅと小さく呻き声を上げた。

1600フェス用

Public 14views 7333
2024-10-01 01:38:45

今まで書いた1600、5160のまとめです

Posted by **@dbh_litorena** (/u/dbh_litorena)

1 2 3 4 5 6 7

Page : 5/7

【メイド服を着ることになった1600】

　60は憤っていた。潜入捜査で変装をすることは何一つおかしなことではない。ただ、その服装があまりにも奇抜すぎたのだ。
『…潜入するバーが正装としてメイド服を着用しているのは知っている。だが、なぜ僕のメイド服だけこんなに丈が短いんだ！』
　隣にいるコナーへ向けて通信を開いた60は全力で吠えた。その手には黒を基調としたメイド服が握られていて、スカートの部分が膝上五センチほどのミニスカートとなっていた。おまけにどこもかしこもフリル満載ときた。そんな可愛らしいメイド服を手渡されて怒り心頭な60を横目に、自身に与えられたメイド服を着込んでいたコナーは小さく肩をすくめた。
『うるさいよ、60。さっさと着替えたらどうなんだ』
『そもそもなぜお前の方は丈が長いんだ！交換しろ、51！』
『嫌だよ』
　同じように丈が短いのであれば60もまだ我慢出来たのであろうが、理由は分からないがコナーに渡された物は一般的な丈のメイド服だった。いわゆるクラシカルタイプというもので、60の手に握られている服装よりは多少動き辛そうではあるが、遥かにマシに見えた。
　未だジャケット姿で唸り声を上げる60を置いてけぼりに、早々と着替え終わったコナーはカチュー

シャを頭部に着け、姿見を覗き込んでいる。首を左右に振ったり、くるりと回っておかしなところが無いかチェックしているコナーは服装もあいまって美しく見えた。
　自分も同じ物であれば、と見つめていると、ふとチェックを終えたコナーが60へと視線を向けてにやりと口角を上げた。
『なに、見惚れてるの？』
「な、」
　そんなつもりはない。少しばかり綺麗だとは思ったが、見惚れているわけでは全くない。そう言い返すつもりが、コナーからの指摘にソーシャルモジュールが正常に働かなくなってしまい言葉を続けることができなくなってしまった。顔を真っ赤にして魚のようにぱくぱくと口を開ける60にくすりとコナーが笑う。
「冗談だよ。…それより、着替えられないなら僕が着替えさせてあげようか？」
　その服を貸して、と手を伸ばしてくるコナーに息を呑んだ60はその手を叩き落とすと勢いよく自身のジャケットを掴んだ。
「…ッ！余計なお世話だ！」
　そのまま勢いに任せて衣服を脱ぎ、その服を当てつけのようにコナーへと投げつけていく。それなりの速度で投げられる衣服を容易く回収するコナーは楽しげで、それがさらに60の癇に障って仕方ない。テキパキと着替えながら憤りを隠す事なく大きく舌打ちをした60は、先程のコナーと同じように姿見の前に立ち、思い切り顰めっ面を浮かべた。
「……」
　あまりにも丈が短すぎる。その短いスカートから見えるのは、華奢な脚ではなく男らしい筋肉質な脚で、より滑稽さが増して見えて落ち着かない気分となってしまう。ぐっと裾を引っ張ったところで丈が長くなるわけではないと分かっていたが、そうせざるを得ないほど丈が短すぎた。
　そわそわと裾を引っ張っていた60はふと背後から覗き込んでくるコナーに気付き、彼から視線を逸らすと唇を突き出した。
「笑いたいなら笑うといい」
「いや、そうじゃなくて」
　背後でまた笑う気配がする。やはり可笑しいんじゃないか。そう思っていると、背後から手が伸びてきてぎゅうと60の身体を抱き締めた。慌ててコナーへ視線を向けると、存外柔らかな笑みを浮かべているのが見えてシリウムポンプがとくんと跳ねた。
「とても似合ってる」
「は？」
「可愛いよ、60」
　そして背後からカチューシャを差した。これで任務に向かえるね、と朗らかな笑いと共に背中を叩いてきたコナーは、60から離れて扉の方へと向かっていく。そんなコナーを間抜けにも口を開けて見送っていた60は、扉を開く音にようやく我に返ると動揺と羞恥に任せて地団駄を踏んだ。そうして更衣室を出て行こうとするコナーの後を荒い足音を立てながら追いかけると、再び通信を開いた。

『お前はすぐそうやってからかって…！この任務が終わったら覚悟しておくんだな、51！』
『からかってなんかないさ、本当に可愛いと思ったんだよ』
『まだ言うか、馬鹿！』
　追いついた60は勢いよくコナーへ肩をぶつけた。衝撃にふらついたコナーがこちらを睨んでくるのに少しばかり溜飲が下がる。いい気味だと鼻を鳴らせば、通信越しに文句飛んでくる。それに噛みつきながら、目的の部屋まで喧嘩の応酬を続けるのだった。

1600フェス用

Public 14views 7333
2024-10-01 01:38:45

今まで書いた1600、5160のまとめです

Posted by @dbh_litorena (/u/dbh_litorena)

1 2 3 4 5 6 7

Page : 6/7

【素直じゃない僕ら】5160

　同じ顔だというのに、どうしてこうも美しいのだろう。いつだってそんな疑問が脳裏をよぎっていく。今だって僕の手の甲に唇を押しつけているだけなのに、潤むブラウンの瞳に影を落とす睫毛も、薄い唇から微かに零れる吐息も、仄かに紅潮した頬にすら目を奪われてしまう。
　ちう、と可愛らしいリップ音を立てて吸い付くと、また別の場所に唇を落とす。何度も何度も、飽きもせずキスを続けるコナーは、僕の手にしか関心がないらしい。だって僕がこんなにも見つめているのに、この行為を始めてから一度だって視線を上げもしないのだから。コナーが僕の手にキスを始めてからもう三十分以上も経過している。…ずっとこのままコナーの顔を見つめていたって構いはしないが、どうせキスをするのなら手の甲ではなくて、
「唇に欲しい？」
「な、」
　コナーの言葉にシリウムポンプがどくんと跳ねた。まさかと手に視線を落とすが、流動皮膚に覆われた手が変わらずにあるだけで素体が露わになっているわけではなかった。通信を開いてもいないし、コナーにハッキングされたわけでもない。なのにあまりにもコナーの問いかけがタイミングが良過ぎて、疑問符が脳裏に浮かんでは消えていく。
「ふふ、君って分かりやすいよね」

そんな僕を楽しげに笑ったコナーがようやく顔を上げて、視線を合わせてきた。同じブラウンの瞳の奥に、欲の火種が灯るのが見えて背筋にぞくりと電流が走る。

「どこがだ」

「教えてあげないよ。君はそのままでいてほしいから」

「馬鹿にしてるのか」

「いいや。…それよりも、言うべき言葉があるんじゃないかな」

　ほら、と人当たりの良い笑みを浮かべるコナーがなんとも腹立たしい。あんなに僕のことを放っておいたくせに。

「僕から言うべき言葉なんてない。だが、お前がどうしてもと言うのなら、…聞いてやってもいい」

「……君、そういうところは可愛げがないと思う」

「言ってろ、馬鹿」

　さあ、どうする。首を傾げて見下ろしてやる。うーん、と間抜けな声で唸ったコナーは一つ溜息を零すと肩を竦めた。

「分かった。じゃあ、僕も言わない」

　ちょっと予想外だった。絶対に言うと思ったのに。目を瞬いていると、コナーがにこりと嫌な笑みを浮かべた。あ、と思った瞬間には、ぐるんと視界が回って、柔らかなベッドに仰向けになっていた。ぽかんと口を開ける僕を、コナーが覗き込んでくる。

「だから我慢比べをしよう。君と僕、お互いの身体に触れ合って、我慢が出来なくなった方が負け。とてもシンプルな勝負だ」

「はあ？」

「勝った方が敗者を好きに出来る。とても魅力的だと思わない？」

「何を勝手に…！」

「じゃあ、勝負を放棄するってことでいいんだね」

「ぐ……」

　それは嫌だ。コナーに負けるのだけは絶対にお断りだ。とはいえ唐突に始まった勝負に困惑しているのも事実で。返事に詰まっていると、コナーがさらに顔を近づけてくる。あと少し、僕が首を持ち上げれば唇が触れ合うほどの距離でぴたりとコナーが動きを止める。

「どうする？」

　囁く声音の甘さにこくりと疑似唾液を飲み込んだ。すぐにでもその唇に触れたい衝動を抑え込んで、にやりと口角を上げた。

「……ふん、受けて立ってやる。早々に負けを認めさせてやるからな」

「その憎まれ口、どこまで続くか楽しみだよ」

　くふりと自信満々に笑うコナーの思惑を粉々に砕いてやる。そう決意した僕は、近すぎるブラウンの瞳を睨み付けながらコナーの身体に手を這わせた。

1600フェス用

Public 14views 7333
2024-10-01 01:38:45

今まで書いた1600、5160のまとめです

Posted by @dbh_litorena (/u/dbh_litorena)

1 2 3 4 5 6 7

Page : 7/7

【お互いだけを感じていて】5160

　ふるりと繊細に震える睫毛、白い頬をわずかに紅潮させて行為に夢中になる彼は相変わらず美しい。触れ合う柔らかな粘膜も、普段よりも少しだけ高い体温も、握り合う手のひらが軋むほどに込められる力も、その全てを独占できるこの時間が、僕にとっては至福の一時であった。
　チカチカとコナーのこめかみが瞬く。きっと僕も同じように瞬いているのであろうと思うと、何だかくすぐったい気分になる。
　くふ、と思わず笑みを零すとコナーから通信が飛んでくる。
『集中して』
　こんなにも夢中になっているというのに、コイツは何を言っているのだろう。通信越しの不機嫌な声に思わずムッと眉を顰めてしまう。
『集中してないのはそっちだろ』
　ぎゅっと握り合う手のひらの流動皮膚を解除して、先ほどまで僕が感じていた全てをコナーへ提示する。そうするとさっきまで薄らと桃色だった彼の頬が林檎のように赤く染まっていくのが、愉快でたまらない。
『ほら』
　追い討ちを掛けるべく通信を送れば、コナーのこめかみが頬と同じ色に瞬いた。

『〜〜〜ッ、もう！』

　あおらないで、と余裕のなくなった声が響く。いつも僕を振り回してくるコイツがどうしようもなくなってしまうこの瞬間が、一番愛おしい。

　ふん、とコナーの言い分を聞き流して僕は再び舌を伸ばした。